九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

本を通して仲間を知る ： コアセミナーでの試み

副島, 雄児
九州大学基幹教育院特別プログラム推進部 ： 教授

田尾, 周一郎
九州大学基幹教育院特別プログラム推進部 ： 助教

平井, 康丸
九州大学農学研究院環境農学部門 ： 准教授

金山, 素平
九州大学農学研究院環境農学部門 ： 助教

他

https://doi.org/10.15017/27254

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2012/2013, pp.35-44, 2013-09. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：

報告

本を通して仲間を知る
－コアセミナーでの試み－

副島 雄児[†] 田尾 周一郎[‡] 平井 康丸[§] 金山 素平[**] 木村 俊道[††]
堀 優子[‡‡] 井川 友利子[§§] 大村 武史[***] 宮嶋 舞美[†††] 工藤 絵理子[‡‡‡]

<抄録>

九州大学の全学教育科目「コアセミナー」は，各学部が必要とする初年次教育の実施を目的として設定され，学部ごとに特徴的な内容と方法を取り入れたセミナーが実施されている．今回，特色ある試験的な取り組みとして，九州大学附属図書館との連携によって，コアセミナーへのビブリオバトルの導入を行った．

受講学生へのアンケート調査の結果から，「読む」，「伝える」，「聴く」などのスキルアップについての成果，「関心の広がり」，「コミュニケーション力の増加」，「人に対する興味・関心の深まり」などの内面的な側面に対する成果などを見てとることができるなど，初年次教育の教材としての有効性を確認することができた．

今回の取り組みは，学部担当教員と附属図書館職員との教職連携による教育現場での実践例として，今後の教育改善や教育開発研究に参考となることが期待される．

<キーワード> ビブリオバトル，コアセミナー，初年次教育，情報リテラシー，教職連携，授業改善，教材開発

Let’s Know about Your Classmates through their favorite books
－A Trial in Core-Seminar－

SOEJIMA Yuji TAO Shuichiro HIRAI Yasumaru KANAYAMA Motohei KIMURA Toshimichi
HORI Yuko IKAWA Yuriko OMURA Takeshi MIYAJIMA Maimi KUDO Eriko

1. はじめに

九州大学の全学教育科目「コアセミナー」（1 年次前期開講）は，各学部が必要とする初年次教育の実施を目的として設定され，学部ごとに特徴的な内容と方法を取り入れたセミナーが実施されている．多くの学部および学科やコース，あるいはプログラム（以下，学科等も含めて学部と記載）で，学生の少人数グループ分けを行い，グループ数に応じた複数の教員がコアセミナーを担当している．教員ごとに用意した初年次教育としてのセミナーテーマを，学生グループが巡回する形式で実施している学部や，あるいは，教員とグループが固定されて半期のセミナーを実施している学部もあるなど，学部ごとに学生数規模や，学部の初年次教育としてふさわしい実施の形態が採られている．

初年次教育としてどのような題材やテーマがふさわしいかは，学部ごとにそれぞれ異なるが，どの学部でも，高校での学習から大学での修学への移行を意識して，“自ら学び修める”ことを意識していると思われる．そのためには，自発的な学修のための技能（リテラシー）の獲得が必要で，セミナーでの学修を支える技術サポートが必要となる．例えば，九州大学附属図書館では，情報リテラシー教育の一環として，「大学図書館活用セミナー」（以下，活用セミナー）や「オンデマン

† そえじま ゆうじ 九州大学基幹教育院特別プログラム推進部教授 （〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地）
E-mail:okosoe@artsci.kyushu-u.ac.jp
‡ たお しゅういちろう 九州大学基幹教育院特別プログラム推進部助教 （〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地） E-mail: tao@artsci.kyushu-u.ac.jp
§ ひらい やすまる 九州大学農学研究院環境農学部門准教授 （〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1） E-mail: hirai@bpes.kyushu-u.ac.jp
** かなやま もとへい 九州大学農学研究院環境農学部門助教 （〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1） E-mail: motohei@bpes.kyushu-u.ac.jp
†† きむら としみち 九州大学法学研究院政治学部門教授 （〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1） E-mail: kimura@law.kyushu-u.ac.jp
‡‡ ほり ゆうこ 九州大学附属図書館利用支援課 （〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1） E-mail: hori.yuko.993@m.kyushu-u.ac.jp
§§ いかわ ゆりこ 同利用支援課サービス企画係 （〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1） E-mail: ikawa.yuriko.308@m.kyushu-u.ac.jp
*** おおむら たけし 同伊都地区図書課企画運営係 （〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地） E-mail:omura.takeshi.802@m.kyushu-u.ac.jp
††† みやじま まいみ 九州大学情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当 （〒812-8582 福岡市東区馬出 3 丁目 1-1）
E-mail: miyajima.maimi.313@m.kyushu-u.ac.jp
‡‡‡ くどう えりこ 九州大学附属図書館 e リソースサービス室 e リソースサポート係（〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1）
E-mail: kudo.eriko.044@m.kyushu-u.ac.jp

ド講習会」（以下，講習会）を提供し，各学部のコアセミナーでの利用の呼び掛けを行ってきた．特に，各学部が必要と考える情報リテラシーの内容に応じて，教員との事前打合せによる活用セミナー/講習会の内容をアレンジすることができるのが特徴である．これまでに多数の実施実績を残しており，平成 18 年度の「活用セミナー」開始時の受講学生数 401 人に対し，平成 23 年度は「活用セミナー」2,631 人，「講習会」906 人となっている．附属図書館の情報リテラシー教育への取り組みとその開発研究については文献[1]に詳報されている．このような技術サポートは，コアセミナーの実施にあたって，必要且つ有効なものとなっており，部局間連携による初年次教育への取り組みとしても意義は大きいと考えられる．

コアセミナーの第一目的である，学部あるいは学科における“自ら学び修める”姿勢の修得以外に，当該学部学生の“まとまり”や“連帯意識”の啓発，あるいは，当該学部学生として求められる“人材像”の自覚など，コアセミナーには第二の目的も設定することができる．第二の目的達成のために，セミナー内容にはさまざまなテーマ設定や教材開発などが考えられるが，コアセミナー担当者単独（あるいは学部独自）の力量の範囲では，アイデアの抽出（テーマ設定），アイデアに基づく実施計画の策定，計画に基づく実行（教材開発）には限界がある．

このような中，技術サポートに留まらず，初年次教育への部局間連携による質的改善への取り組みとして，附属図書館から「ビブリオバトル」[2]の導入への働きかけが進められている．ビブリオバトルは，“人を通して本を知る・本を通して人を知る”ことがキャッチフレーズとして挙げられている．図書館側の立場からは，活字離れの阻止と活字文化の維持，図書館の利用促進など，ビブリオバトルの浸透と普及には多大な効果や影響を期待していることは言うまでもないが，一方，ビブリオバトルの教材は本であるが，そこに“人”が介在する点では，上記コアセミナー第二の目的の観点から，ビブリオバトルはコアセミナーに適合した教材となり得る可能性が高いことが期待される．

附属図書館からの働きかけによるコアセミナー担当教員への説明や十分な事前打合せを経て，平成 23 年度の法学部と農学部（いずれも，コアセミナーの特定の少人数グループ），および２１世紀プログラム（以下，21cp）のコアセミナーで扱う一つの教材として，ビブリオバトルを導入した．もちろん，試験的な取り組みとしての位置付けであり，受講学生へのアンケート調査などを計画的に行い，コアセミナー導入の効果等を検証できるようにした．この報告では，２１世紀プログラムでの導入を中心に，ビブリオバトルの実施状況やアンケート調査結果等を紹介し，これによって，今後の初年次教育，ひいては平成 26 年度から開始されるアクティブラーナーの育成を目指す基幹教育への応用について，その素材を提供できればと期待する．なお，アンケート調査は，初めてのビブリオバトル発表時（事前アンケート），2 回目の発表時（中間アンケート），コアセミナー終了時（事後アンケート）に実施した．

2. ビブリオバトルの実施形態

コアセミナーは 1 年次前期に開講され，基本として 1 コマ 90 分×15 週で開講する 2 単位の科目である．募集人員 26 人（平成 23 年度入学生数は 28）の 21cp の個々の学生は，自らの関心に基づき独自のカリキュラムを構築するため，21cp に共通する専門性や学問分野が特定されない．このために，21cp では，従来「読む・書く・発表する」を基本としたコアセミナーを実施していたが，低年次（1・2 年次）専攻教育として開講しているジュニア・ゼミとの内容的な重複があるため，コアセミナーの位置付けと目的を再検討し，ジュニア・ゼミとの区別化を図ってきた．この中で，上述したコアセミナーの第二の目的のうち，「当該学部学生の“まとまり”や“連帯意識”の啓発」については，学問分野に依存するテーマ設定ではなく，方向性は異なるが「同じ志を持ち，互いに切磋琢磨する」集団としての意識付けを行うテーマを模索していた．このためには，学生間の“人”としての相互理解や，自分を知らせるための自己表現力，相手を知るためのコミュニケーション力の啓発を促す仕掛けが必要であり，ビブリオバトルの導入を行うに至った．

28 人の学生を A～D の 4 グループに編成し，グループごとに表 I に示すスケジュールで実施した．したがって，1 グループは 6 または 7 人である．ゼミの最初に 5 分程度の打合せとグループの教室移動，一人 5 分の発表と 2～3 分の質疑応答で 60～70 分，チャンプ本の投票などで 10～15 分程度を見積り，1 コマ 90 分の講義として丁度良い時間配分とした．

表 I　ビブリオバトルの実施内容とスケジュール

月日	内　容	実　施　方　法	
5月10日	ビブリオバトルの説明	説明担当：図書館職員	
5月31日	第 1 回練習戦	A グループ（発表）×B グループ C グループ（発表）×D グループ	発表者に事前アンケート実施
6月7日	第 2 回練習戦	A グループ×B グループ（発表） C グループ×D グループ（発表）	

6月 14日	練習戦で紹介した本の書評作成		
6月 21日	第1回決選	A グループ（発表） ×C グループ B グループ（発表） ×D グループ	発表者に中間アンケート実施
6月 28日	第2回決選	A グループ ×C グループ（発表） B グループ ×D グループ（発表）	
7月 5日	最終決選	各グループのチャンプ本と準チャンプ本 （総計8冊）	全員に事後アンケート実施

最終決戦（7月5日）は伊都地区センター2号館の嚶鳴天空広場 Q-Commons を利用し，広場にいる学部学生も観戦可能とした．最終決戦をオープン形式で実施したのは，発表者が発表を公開している意識を持ち，より真剣に取り組む意識を持つこともねらったためである．図1に，ビブリオバトル実施の様子を示し，資料1に，ビブリオバトルで取り上げられた本を掲載した．

図1　ビブリオバトルの実施風景

3. アンケート調査の結果（21cp）

ビブリオバトルへの取り組みに際し，受講学生の意識がどのように変化するのかを明らかにするために，事前，中間，事後アンケート調査を実施した．以下，ビブリオバトルに初めて取り組んだ練習戦時（事前アンケート），および2回目に取り組む決選時のアンケート結果（中間アンケート）の比較を21cpについて抜粋して考察し，受講生のビブリオバトルへの取り組み姿勢や成果について比較する．

3.1. 紹介した本について

ビブリオバトルで紹介する本について，さまざまな条件やテーマを設定することは可能であるが，21cpでは学生個々の関心や問題意識を固定化することを避けるために，敢えて条件やテーマは一切設定しなかった．したがって，発表者が準備する本は，発表者の観点で自由に選択したと思われる．図2に，質問枝1-2「なぜその本を選びましたか（複数回答可）」の結果を示した．

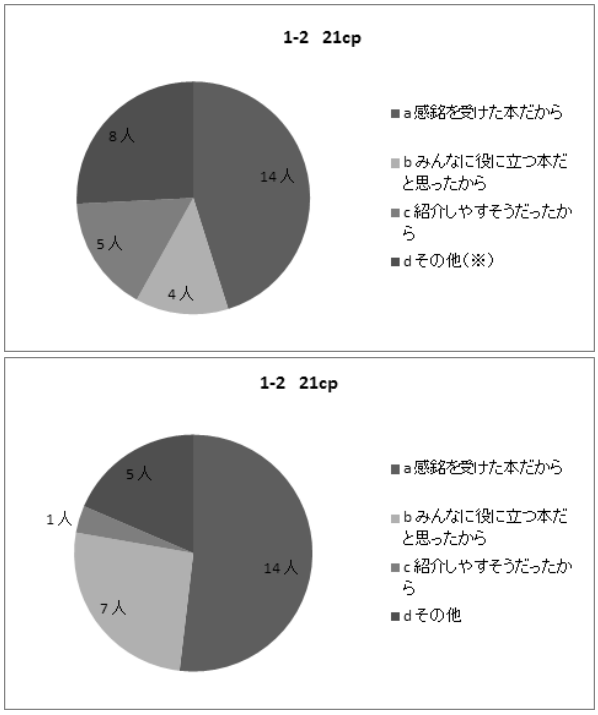
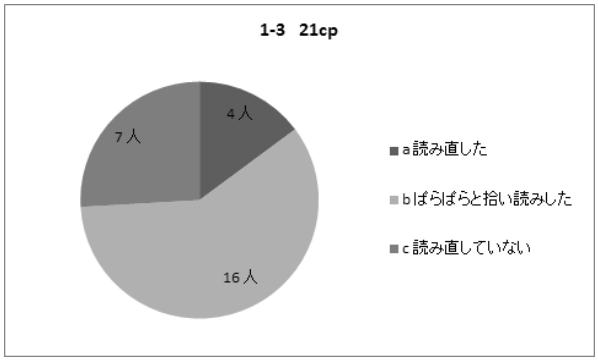


図2　質問枝1-2本の選択理由
上：事前アンケート　下：中間アンケート



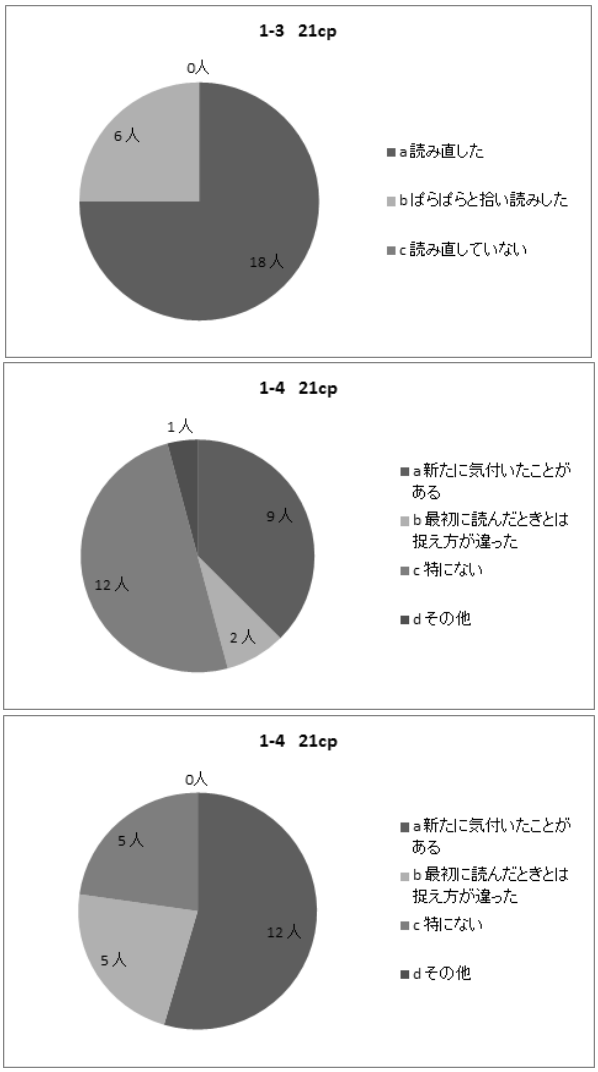


図 3　質問枝 1-3，1-4 に対する回答の変化

図 2 に見られるように，最初は，特に意識をせずに（c.紹介しやすそうだったからと d.その他）本の選定を行った割合は 40%程度に上るが，中間アンケートでは 15%程度に激減する．このことは，ビブリオバトルで紹介する本について，なぜ紹介するのかという発表者の意義や価値付けが向上したことを示している．また，（b.みんなに役に立つ本だと思ったから）が大幅に増えていることに注目したい．

その他，回答枝 1-3「紹介するにあたり，その本を読み直しましたか」，回答枝 1-4「読み直して新たな発見がありましたか」についても，有意な変化が見られている．（図 3）

中間アンケートでのみ質問している質問枝 1-5.「練習試合の時と比べて，紹介する本を選ぶポイントは変わりましたか」，および質問枝 1-6「前項で a と答えた方，どのように変わりましたか」については，図 4 および表Ⅱに示すような結果を得ている．この結果は，ビブリオバトルを経験すると，約 30%の発表者は，発表に関して質的な変化を受けていることを示している．

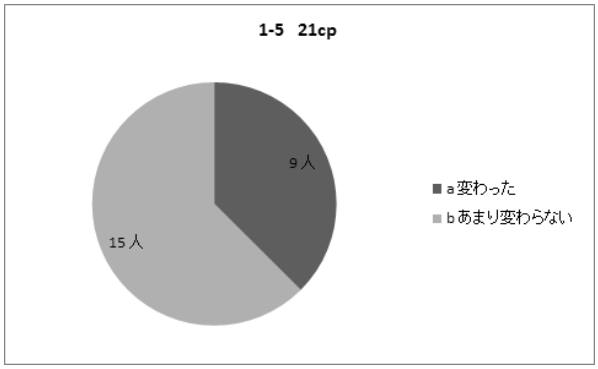


図 4　質問枝 1-5（中間アンケート）

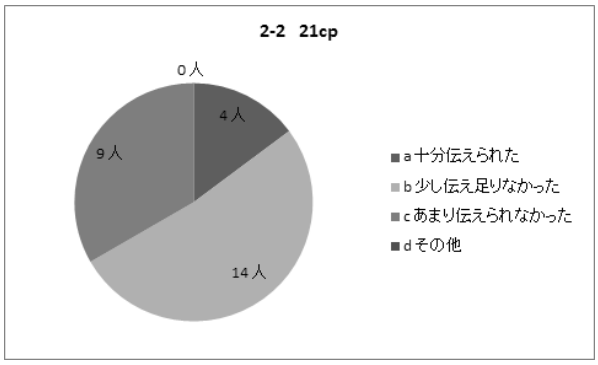
表Ⅱ　質問枝 1-6（中間アンケート）の記述回答

自分が好きなことではなく，みんなの役に立ちそうなものを選んだ／みんなが興味のありそうな本を選んだ／話の組み立てができた／話せる内容が豊富になった／できるだけ学術的な本をえらぼうとした／もっと真剣にとりくんだ／ナゾをのこすようにした／紹介することを考えて選んだ／聞く側の心境を考えた／内容だけでなく，作者の視点から何が言いたいのかをとらえるようにした．

3.2. 発表について

発表についての変化では，特に発表準備と発表の達成度について比較を行っている．発表準備については，質問枝 2-1「あらかじめ話す内容を原稿にしましたか」について「本番出たとこ勝負」が事前アンケートで約 45%であったのに対し，中間アンケートでは約 15%に減少していた．ビブリオバトルでの発表の難しさを経験し，多くの発表者が発表へ向けての準備に取り組んだことがわかる．

一方，質問枝 2-2「自分の伝えたかったことは伝えられましたか」についての結果を図 5 に示した．この結果からわかるように，発表の準備に対して，その効果はほとんど変わらないことがわかる．このことは，準備の状況によらず，その成果は十分に得られなかったと受け取る発表者が多いことを示している．ビブリオバトルの発表に対する上達感は，1 回や 2 回の経験では得られにくい．



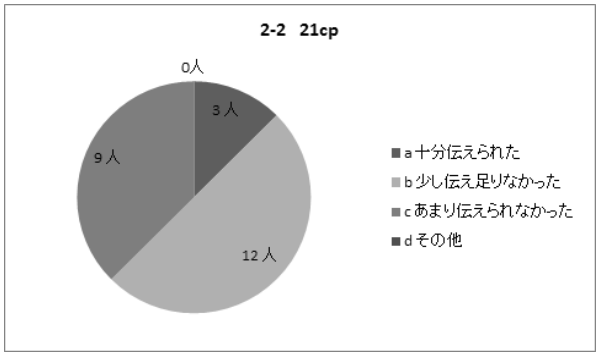


図 5　質問枝 2-2 に対する回答の変化

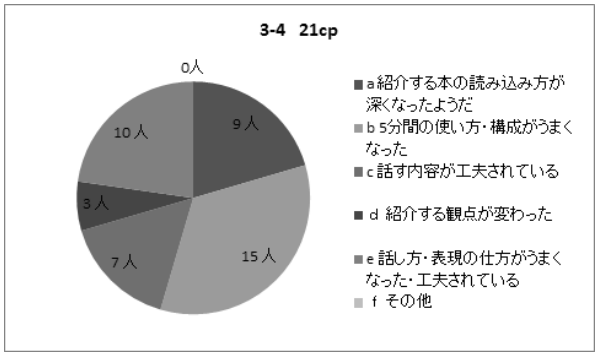
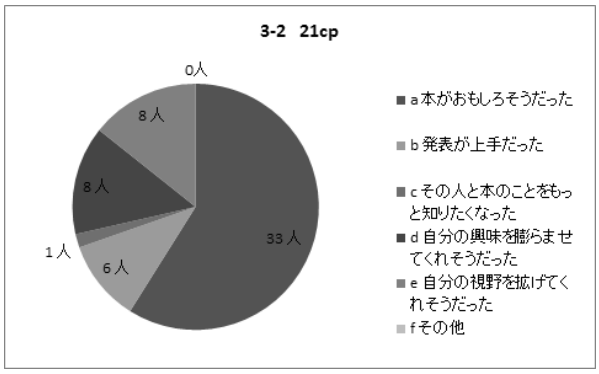


図 6　質問枝 3-2，3-4 に対する回答

実際に，質問枝 2-5「今回発表するにあたり，ステップアップの目標を決めましたか」については，約 70%の発表者が 2 回目には目標を定めて取り組んでいるが，質問枝 2-6「その目標は達成できたと思いますか」については，目標が達成できたと考える発表者は 50%に満たない．

3.3. 他人の発表を聞いて

ビブリオバトルの参加者として，どのような基準でチャンプ本の投票を行ったかについては，質問枝 3-2「「一番読みたくなった」決め手は？（複数回答可）」によって明快に示されている．約半数を占めるのが「本が面白そうだった」で，次いで，「自分の興味を膨らませてくれそうだった」，「自分の視野を広げてくれそうだった」となる．（図 6 の上図）このことは，ビブリオバトルの参加者が，純粋に本に対する興味を掻き立てられていることを示していると思われる．また，発表者の 1 回目の発表からの変化に対しては，質問枝 3-3 で約 60%の発表に変化があったと回答し，そのうち，質問枝 3-4「どのような変化を感じましたか（複数回答可）」では，図 6 の下図に示すように，5 分間の時間の使い方の上達，表現の上達など，回答者一人がおおよそ 2 つ以上の上達した変化を挙げている．これは，質問枝 2-6 でみた自己評価の低さに対して，他者の評価が高くなっていることを示している．1 回や 2 回の発表経験では自己評価は上昇しないものの，実際には 2 回目の発表は確実に上達していることが伺える．



質問枝 3-5 と 3-6 は，発表の視聴者としての自己評価を問うている．約半数の視聴者が自分の聴き方に変化があったと回答し，それらはほぼ同等（つまり 25%ずつに分散）に，a.本の内容について深く考えた，b.発表者の考えや背景に思いをめぐらした，c.発表者の表現力について気づきがあった，d.興味・関心に広がりが持てた，となっている．質問枝 3-2（図 6）に見られるように，読みたくなった本の選定にあたっては，視聴者が純粋に本に対する興味を示している結果に対して，本の選定理由とはならないにしても，（b.発表者の考えや背景に思いをめぐらした）のように，発表者についての興味・関心を感じている状況があることを示しているのは興味深い．

4. 事後アンケート調査の結果（法学部・農学部・21cp）

次に，ビブリオバトルをコアセミナーに導入した法学部（15 人），農学部（14 人），21cp（28 人）について，事後アンケートの調査結果の比較を行ってみる．ここでは，学部によって顕著な差異が見られるものを取り上げる．ただし，法学部では，ビブリオバトルの本の選定に対して政治学・法学の古典・名著を指定している．また，農学部では“世界”というテーマを設定し，“世界”をどのように解釈するかは発表者の判断にゆだねた．

質問枝 2-1「これまで興味のなかったジャンルの本に関心を持つようになりましたか」についての結果を図 7 に示す．法学部，農学部では，「c.関心を持ち，これから読んでみたいと思う」という回答が目立っており，ビブリオバトルを通して関心の広がりを持った受講生が多い．これから，その本を読んでみたいと答えており，「人を通して本を知る」効果が十分に現れている．一方，21cp では，関心を持った本をこれから読もうとするのと同等に，既に読んでいる（回答枝の a.と b.）受講生がいることが特徴と言える．

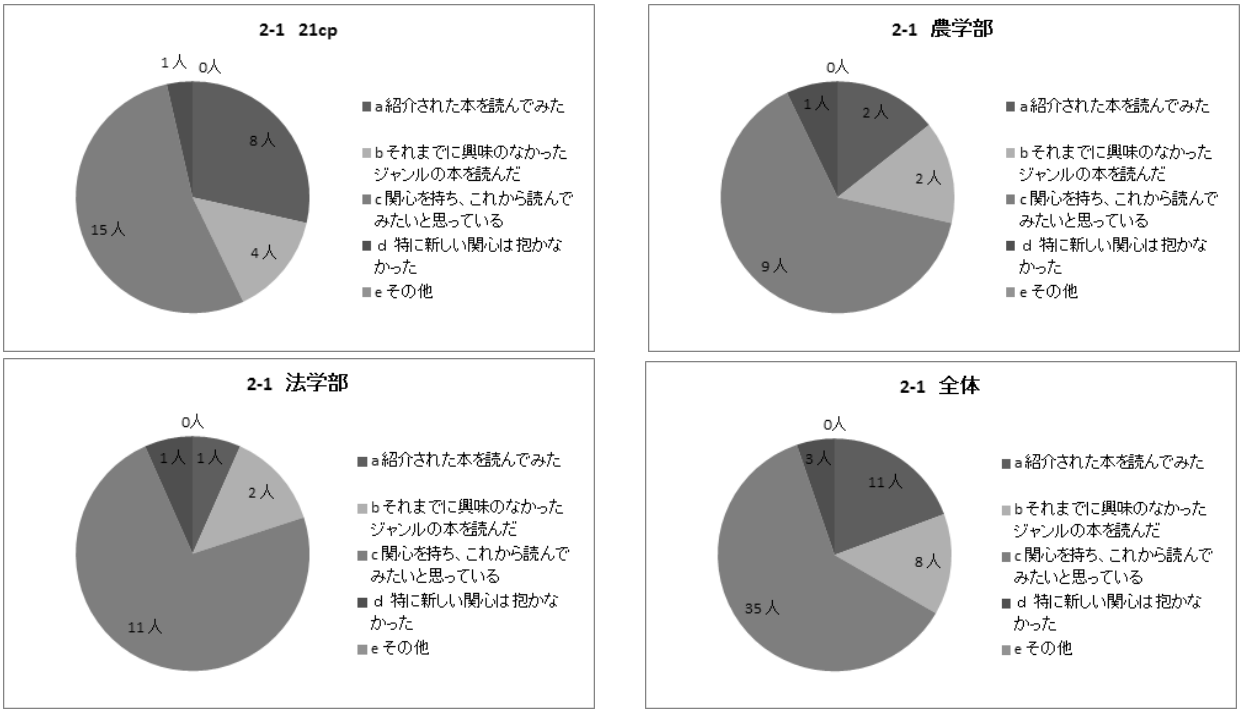


図 7　質問枝 2-1 の学部別の結果

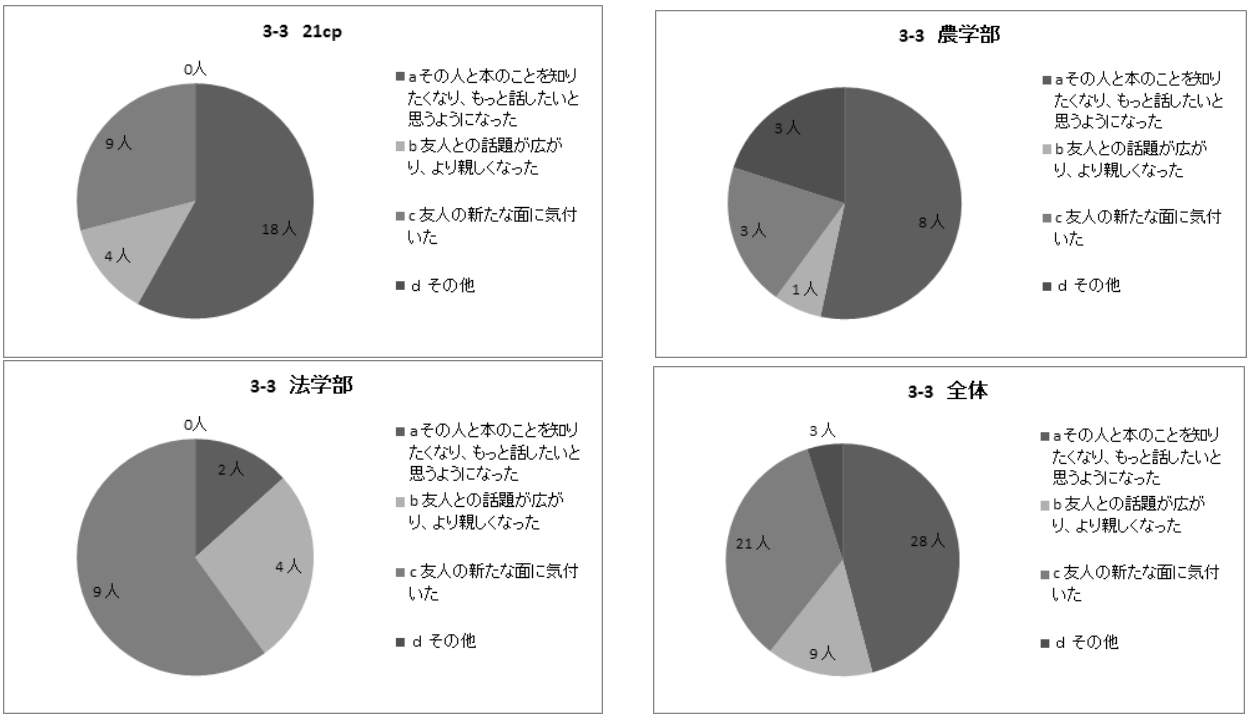


図 8　質問枝 3-3 についての回答

質問枝 2-2「これまでに興味のなかったことや話題，問題等に関心を持つようになりましたか」については，法学部で約 80%，農学部で約 70%，21cp で約 90%の受講生がポジティブな回答（回答 a.，b.，c.）を行っており，ビブリオバトルを通して変化した自分について，自己評価が高い．

質問枝 3-3「友人の読んだ本の話を聞いて，よりその友人に興味を持ったことがありますか」については，図 8 に示すような結果が得られている．農学部，21cp では，「a.その人のことをもっと知りたくなった」が半数を超えており，また，法学部では「c.友人の新たな面に気付いた」が半数を超えている．前者は人に対する興味・関心が深まっていることを，後者は，それが新たな発見として意識されていることを示していると思われるが，いずれにしても，「本を通して人を知る」が達成されていると言える．

質問枝 4-1「人前で話すのは得意ですか」についての結果を図 9 に示す．法学部，農学部の回答が大学生の一般的な状況と思われるが，苦手意識を持つ学生が多い．また，質問枝 5-2「どんなジャンルの本を読みますか（複数回答可）」では，それぞれの学部の特徴を示しているように思われる．（図 10）すなわち，21cp ではかなり広い範囲にわたっていることがわかる．興味深いのは，法学部では「b.人文科学，c.社会科学」よりも「d.サイエンス/テクノロジー」が多く，逆に，農学部では「d.サイエンス/テクノロジー」よりも「b.人文科学，c.社会科学」が多いことである．このことは，読書が大学での専門分野や修学分野とは無関係で，むしろそれらから解放される自由な時間として使われていることを示しているのかもしれない．

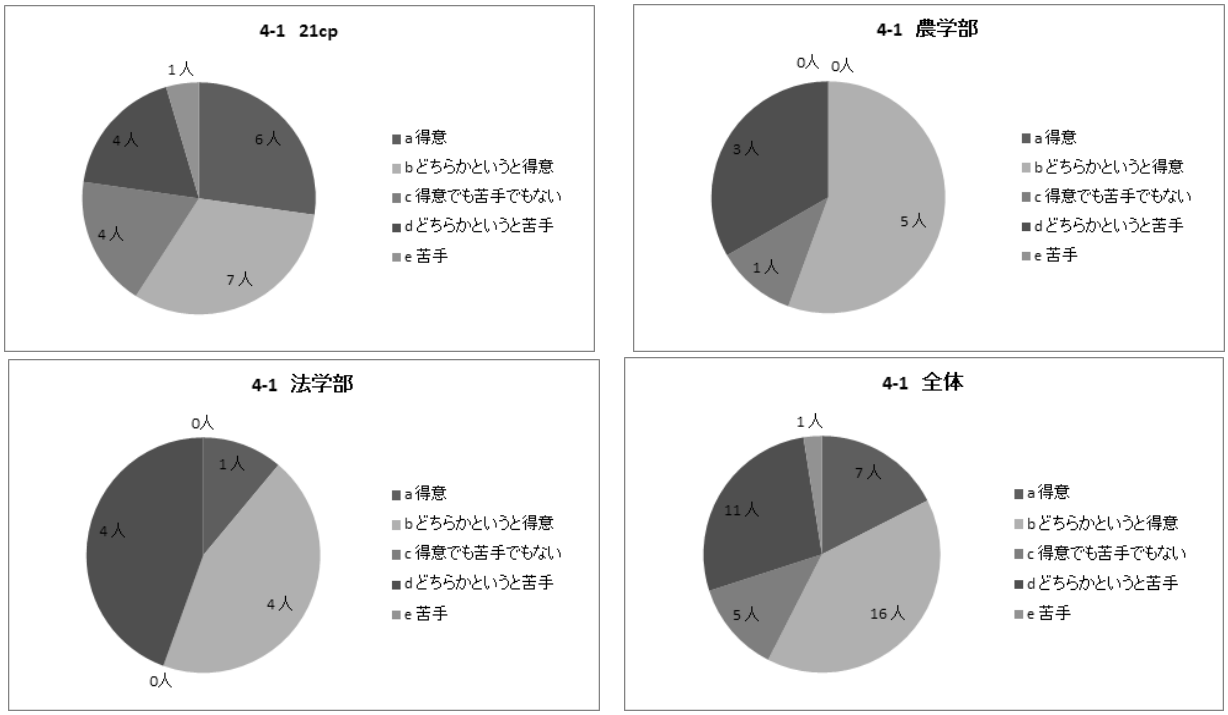


図 9　質問枝 4-1 についての回答

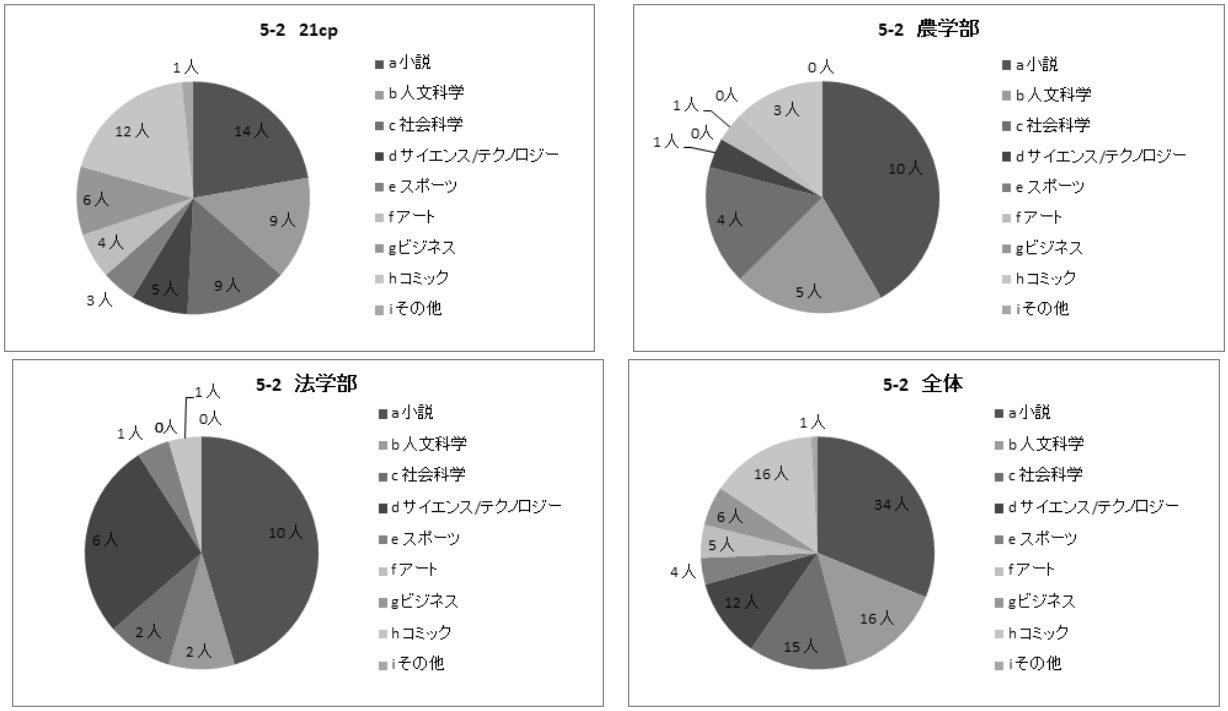


図 10　質問枝 5-2 についての回答

5. 総合評価について

ビブリオバトルの導入について，コアセミナーとしての効果を検討する．初めに述べたコアセミナーの第二の目的，「学生の“まとまり”や“連帯意識”の啓発」に関して，コアセミナーを導入した担当教員へのアンケート調査では，次のような意見が寄せられている．

○ビブリオバトルを取り入れたことで，授業（またはクラス）として効果があったと思われる点

- 自分の考えや調べた内容を人に伝えるスキルが改善された．（農）
- 通常の演習と異なる課題の設定，セッティング，プレゼンテーションによって，演習の雰囲気が変わり，ゼミ生同士のコミュニケーションが以前に増して豊かになった．何よりも（学生の）表情が良くなった．（法）
- アンケート調査結果には直接現れてこないが，クラス内での学生同士の相互理解が深まったことが，学生達の日常の行動や会話等から感じとられる．付加的な成果として，教員が学生一人一人の考えや興味・関心を知ることができ，今後の修学指導に有益であろうと思われた．(21cp)

○今回の取り組みに関しての意見や感想，図書館への要望など

- 受け身になりがちな講義が多い中で，学生が能動的に学ぶいい機会だった．（農）
- ビブリオバトルは，「動き」のある「ソフト」な取り組みと思うが，ただ面白いだけでなく，それがとくに高年次以上における「ハード」な論文発表や研究報告にうまくつながるような，それなりの緊張感と静かな喜びが伴う学問の世界の入口になればと思う．（法）
- 通常は発表することに重心を置きがちだが，人の発表を（聴者が発表者の発言の行間や背景を想像する力をフル稼働させて）聴くことに対して，通常のゼミ等の発表よりも効果的な教材であったと思う．（21cp）

○（本の選定について）テーマを設定したことで，効果があったと思われる点

- （農）ゆるやかなテーマ設定「世界」
  ゆるやかなテーマ設定は，各学生がそのテーマをどのようにとらえるか様々であったので，学生が人によって様々なとらえ方をすることを知る良い機会になった．
- （法）ハードルの高いテーマ設定
  「政治学・法学の古典・名著」
  演習自体の目標設定によって変わってくるかと思うが，ハードルを上げることによって，九大生の高い潜在的な能力を「潜在」させずに引き出すことができたと思う．ただ，問題はそれが以降も持続するかどうか．
- （21cp）テーマ設定はなし
  今回はテーマ設定を行わなかったが，その分，学生個々の個性あふれる本が選定されて，バラエティーに富んだビブリオバトルとなった．

○更に効果を上げるため，または，更におもしろくするための意見やアイデア

- どこに効果を求めるかによるが，コミュニケーションスキル重視なら現状の取り組みやすい方法が良い．もし，読む力の向上を期待するなら，皆が同じ本を読んで理解度を比較するなどする必要があるかもしれない．（農）
- 観客が限られてしまうが，九大は総合大学なので，政治学や法学といった分野別のバトル（で他分野の人にその面白さを伝える）や，テーマを専門的なものに絞って，たとえば「丸山真男の必読書ベスト５」などがあっても良いと思う．（法）
- クラスの中で閉じたビブリオバトルだけではなく，例えば最終戦はオープン形式で行い，見知らぬ多くの視聴者にさらされた方が，発表者にはより効果的な経験になると思われる．ビブリオバトル導入クラスが図書館で合同開催を試みるなどの連携は有効かもしれない．（21cp）

ビブリオバトルを通して得られる能力の向上については，表Ⅲに示すような総合評価が得られている．教員の印象からの回答ではあるが，この評価結果は，前述した学生のアンケート調査からもその妥当性を窺うことができる．

表Ⅲ　ビブリオバトルで習得される能力についての総合評価
（◎そう思う ○ままそう思う ×そう思わない △わからない）

	農学部	法学部	21cp
よむ力（内容を深く読み込む）	×	○	△
伝える力（何を伝えるか）	○	◎	○
伝える力（どうやって伝えるか：話の構成，話し方）	○	◎	◎
興味・関心の拡大	◎	○	◎
コミュニケーション力・コミュニケーションの円滑化	○	◎	○

21cp は，募集人員すべてがセンター試験を課さない AO 入試である．合格発表は 11 月に行われるため，4 月の入学までの期間に，入学前学習課題を提示し，入

学前の 1 月～3 月に，いくつかの種類の学習成果を報告しなければならない．課題の中には，必ず読書とその書評執筆（あるいは読書感想を含むレポート）を取り入れている．学生個々の書評に対しては，入学後にコアセミナーを利用して，担当教員からのコメントと総評を還元している．ビブリオバトルは，この課題に続く，応用編的な位置づけとして実施することができた点は，教材としても優れていたと思われる．

学部ごとの単独の取り組みとしては，なかなか手が付けられない新しい試みを，今回は附属図書館等の連携によって試行したことは，学部と附属図書館の双方にとって有益な試みとなったことは間違いない. また，筆者らは，ビブリオバトルを実施した時点で，集会を持ち情報交換会を開催したことも付記する．

6. おわりに

この取り組みは，主として附属図書館の職員を中心に学部教員との連携によるが，同時に，読売新聞社および活字文化推進協議会事務局の多大な支援を受けて実施した．ここに謝意を表する．また，21cp では，引き続き 1 年次後期に読売新聞社が提供する「よみサポプログラム」（朝刊の学生への無償提供と, 新聞を教材としたジュニア・ゼミでの講演会の開催提供）を受け，最終的には，池上彰氏の公開講演会をゼミの一環として開催していただいた．読売新聞社の多大なるご協力に感謝するとともに，大学初年次教育および高等教育への関心と，貢献に敬意を表する．

今後，更に新たな取り組みへの意欲を持ち続けるとともに，今回の成果を広く大学の教育へ普及，浸透させる取り組みを継続したい．

参考文献

[1] 兵藤健志，天野絵里子，中園晴貴，“大学図書館活用セミナーをリデザインする”，九州大学附属図書館研究開発室年報 2011/2012，pp.24-31，2012.

[2] ビブリオバトルについては，以下を参照
知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト．http://www.bibliobattle.jp/，(参照 2013-06-03).

※すべてのアンケート結果をご覧になりたい方は，九州大学附属図書館利用支援課，堀優子にご連絡ください．

※ビブリオバトルの記録は以下を参照. 21cp のトーナメント戦，農学部の実践編は動画も同サイトに掲載している．
九州大学附属図書館．“九州大学ビブリオバトル”．Cute.Guides．http://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/bibliobattle, (参照 2013-06-03).

資料 1　ビブリオバトルで取り上げられた本（☆印はチャンプ本．★印は最終決戦でのチャンプ本）

■ 21 世紀プログラム

練習試合

A 班		物理学と神
	☆	日本国家再建論: 国民を欺き続ける国家の大罪 / 中西輝政，田母神俊雄著
	☆	江戸川乱歩傑作集「人間椅子」
		貧困大国アメリカ / 堤未果著
		暁のひかり / 藤沢周平著
		笑う入試問題 / 新保信長著
		セレンディピティ / マーク・クライン脚本
B 班		ソーシャルビジネス革命 : 世界の課題を解決する新たな経済システム / ムハマド・ユヌス著
		生物と無生物のあいだ / 福岡伸一著
		人の心がまるごとわかる心理学 / 植木理恵著
		無限論の教室 / 野矢茂樹著
	☆	堕落論 / 坂口安吾著
		みじかい命を抱きしめて / ロリー・ヘギ著
		白洲次郎 : 占領を背負った男 / 北康利著
C 班		プリンセストヨトミ / 万城目学著
		聖徳太子「十七条憲法」を読む : 日本の理想 / 岡野守也著
		日本語教のすすめ / 鈴木孝夫著
		ストーリー・セラー / 有川浩著
		生きながら火に焼かれて / スアド著
	☆	モリー先生との火曜日 / ミッチ・アルボム著
		食欲と性欲:照沼ファリーザのワンダーランド / 照沼 ファリーザ著
D 班	☆	青年は荒野をめざす / 五木寛之著
		グミ・チョコレート・パイン（グミ編） / 大槻 ケンヂ著
		アジアンタムブルー / 大崎善生著
		大人もぞっとする初版『グリム童話』 / 由良弥生著
		ビジネスマンのための「人物力」養成講座
		アルジャーノンに花束を / 小宮一慶著
		おもてなしの経営学 / 中島聡著

トーナメント戦

A 班	☆	科学と人間の不協和音 / 池内了著
	☆	なぜ日本の教育は変わらないのですか？ / グレゴリー・クラーク著
		くるぐる使い / 大槻ケンヂ著
		憲法の力 / 伊藤真著
		歴女カオルの「良いお金」と「悪いお金」の経済学 / 町井登志夫著
		セックス神話解体新書 / 小倉千加子著
		蜘蛛の糸・杜子春・トロッコ / 芥川龍之介著
B 班		ディープエコノミー / ビル・マッキベン著
		下流志向 / 内田樹著
	★	数学ガール（ガロア理論） / 結城浩著
		書を捨てよ、町へ出よう / 寺山修司著
		爆笑問題のニッポンの教養:深海に四〇億年前の世界を見た! 地球微生物学 / 高井研ほか著
		若き友人たちへ : 筑紫哲也ラスト・メッセージ / 筑紫哲也著

	☆	はてしない物語 / ミヒャエル・エンデ著
C 班		西の魔女が死んだ / 梨木香歩著
	☆	二十歳の原点 / 高野悦子著
		「1 日 30 分」を続けなさい / 古市幸雄著
		歯がゆい国日本—なぜ私たちが冷笑され、ドイツが信頼されるのか / クライン孝子著
		ユダヤ人大富豪の教え−幸せな金持ちになる 17 の秘訣 / 本田健著
		きいろいゾウ / 西加奈子著
	☆	モモ: 時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語 / ミヒャエル・エンデ著
D 班		暴力団 / 溝口敦著
		海が燃えた日—究極のヨットレース、アメリカズカップに挑戦したニッポンチーム / 武村 洋一, 山崎達光著
	☆	いつまでも、いつまでもお元気で—特攻隊員たちが遺した最後の言葉
		共食いキャラの本 / 大山顕著
		ブランド王国スイスの秘密 / 磯山友幸著
	☆	涙の理由 / 重松清, 茂木健一郎著
		フランケンシュタイン / メアリー シェリー著

■ 農学部

導入編 (テーマ「世界」)		
A 班		地球外に生命を探る : 生命が存在するのは地球だけか? / 水谷仁編集
		図解 世界がわかる「地図帳」—眠れないほど面白い これが世の中を見る「新しいモノサシ」 / 造事務所著
		サイエンス(雑誌)
		深夜特急 / 沢木耕太郎著
		ホット・ゾーン / リチャード プレストン著
	☆	ミッキーマウスの憂鬱 / 松岡圭祐著
		四畳半神話大系 / 森見登美彦著
B 班		魔法使い倶楽部 / 青山七恵著
		宇宙の進化の謎—暗黒物質の正体に迫る / 谷口義明著
		そうだ、葉っぱを売ろう! : 過疎の町、どん底からの再生 / 横石知二著
		こころの処方箋 / 河合隼雄著
	☆	世界がもし 100 人の村だったら / 池田香代子再話
		世界の中心で、愛をさけぶ / 片山恭一著
		あなたを忘れない / 和佐田道子著
実践編(1)		
		渇水都市 / 江上剛著
		誰の上にも青空がある / HABU 著
		僕たちは世界を変えることができない / 葉田甲太著
		渋沢栄一 100 の訓言 / 渋澤健著
	☆	あの夕陽・牧師館 / 日野啓三著
		スキップ / 北村薫著
		これからを生き抜くために大学時代にすべきこと / 許光俊著
実践編(2)		
		ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。 / 辻村深月著
		ガンジス河でバタフライ / たかのてるこ著
		アルジャーノンに花束を / ダニエル・キイス著
		ALWAYS 三丁目の夕日 / 山本甲士著
	☆	「のび太」という生きかた—頑張らない。無理しない。 / 横山泰行著
		巨大津波は生態系をどう変えたか : 生きものたちの東日本大震災 / 永幡嘉之著
		“It(それ)”と呼ばれた子 / デイヴ ペルザー著

■ 法学部 (テーマ「政治学・法学の古典・名著」)

A 班		コモン・センス / トーマス・ペイン著
		カティリーナ弾劾 (キケロー選集 3) / キケロー著
		政治学 / アリストテレス著
	☆	正義論 / ジョン・ロールズ著
		社会契約論 / ジャン=ジャック・ルソー著
		君主の統治について : 謹んでキプロス王に捧げる / トマス・アクィナス著
		権利のための闘争 / イェーリング著
B 班		統治論 / ジョン・ロック著
		社会契約論 / ジャン=ジャック・ルソー著
		大衆の反逆 / ホセ・オルテガ・イ・ガセット著
		永遠平和のために / イマヌエル・カント著
	☆	政策形成の過程 / チャールズ・E.リンドブロム, エドワード・J. ウッドハウス著
		政治的なものの概念 / C. シュミット著
		自由論 / J.S.ミル著
		日本幽囚記 上・中・下巻 / ゴロウニン著